

Adult Only
R-18

『メダリ〇ト』本



2nd spin

教室経営を
助けるための『かんたんなお仕事』

前回までのあらすじ

フィギュアスケート教室に通う少女、祈。

純粹かつ、無知な彼女は

『教会と経営を助けるため』という

大人の口車を鵜呑みにし、

見知らぬ男に身を委ねることだ。

最初は忌避感のみの肉体的接触だった。が、男の手練手管に次第に、自分の中の肉欲を刺激され、性に溺れていく……。

純血すら男に捧げるも、むしろ、自分から積極的に身を委ねさえするようになった祈は、淫靡かつ退廃的な性の宴に没頭していくのだった。

今日も今日とて
フィギュアスケートの
練習に進進する祈ごと
『結束いのり』。

スルスルとリンクの上で
技を決め、見ているものを魅了する。



かつては自身の意見を
言うことすらままならない
おとなしい性格の祈だったが、
最近では、動きが太刀になり、

大人も、他の選手も
一目置くようになってきた。



しかし、彼女をよく知る
担当コーチは、
今の彼女に違和感を抱いた。

ワイ

『なにか悩み事でも?』
というコーチの質問に
祈は
「な、なにでもないですっ」と
あからさまな反応。

ワイ

明らかに何かを隠している
彼女に、コーチは怪訝そうな表情を
浮かべるが、しかし
問いたたすようなマネを彼はしない。

ざわ

『なにかあったら相談してね』と
優しい笑顔で祈に言う、が
当の祈は、それを嬉しく思いつつも
どこか、人ごとのように感じていた。

ざわ

というか、
ちよっとふんわりもよかった。

今、彼女の頭の中には
まるで別の事柄が
大きなウェイトを占めている。
それは――

「んじゅっ♡んっ♡んんっ♡
はぷっ♡んぷ…ちゅ、ちゅううっ♡」

んじゅっ♡

んじゅっ♡

んじゅっ♡

んじゅっ♡

祈が通うアイススケート場。
その地下に密かに建造されている
謎の憩いの場。

薄暗くどこか獣じみた匂いの
充滿する、その空間で
祈は今日も男の性器を唾えていた。

ちゅっ♡

ちゅっ♡

ズル

「はぷっ♡んっ……っ♡
ん♡ん♡ん♡はあむ♡ん♡むっ♡
レロレロレロ……おおっ♡」

ズル

夢中な様子で、
自分よりふたまわりは
年上の男性の股間に顔を埋め、
舌と唇、口全体を使って性奉仕する。

「おほ…ツ、これは…っ♡
祈ちゃん…っ、ちんぽしゃぶりが
上手になったねえ♡」

肉茎しゃぶりに余念がない祈に
当の、ちんぽ保持者である男は
満足そうに背中を震わせる。

「んっ♡んっ♡んあ〜……っ♡」
見せつけるように亀頭を舐め回し
挑発的な動きで舌を肉槍にからませる。

フィギュアスケートの練習で
火照った身体は体温が高く、
小さな舌から、肉茎に粘膜を
伝って、その熱が伝播するようだ。

「じゅぞツ♡じゅぞツ♡
じゅぼツ、ぞぞぞツ♡♡♡
「い、祈ちゃん…っ、祈ちゃんッ」

あまりにも熱の入った
口奉仕に、むしる男は
追い詰められたように声を出す。

「ふえあ…ツ、なんれすかあ……」
熱に浮かされたような瞳で
男を見上げる祈。
その間も、チロチロと
尿道口を舌先で舐め、刺激する。

「ちよ、ちよっとペースが
早いかな……。このままじゃ、
すぐに出してしまおうよ」

ちよっ
ちよっ
ちよっ

ちよっ
ちよっ
ちよっ

ちよっ
ちよっ
ちよっ
ちよっ
ちよっ

ちよっ
ちよっ
ちよっ

こういう行為に慣れているはずの男は
しかし、祈の熱烈なフェラに
あっという間に追い込まれてしまっていた。

「あ…、そうですね…。
えへへごめんなさい♡
そう言いながらも、祈は
くぽっ♡くぽっ♡亀頭を吸う。

ちゅるッ

キュッ

かみぽッ

はぁ♡

「ちよ、ちよッ!

ほほんとに出来るからッ!」

余裕のない男の叫びに
祈はしかし、フェラの手を
緩めない。

キュッ

はぁ♡

ふあああ……♡
ちんぽ、おいしっ♡おいしい♡
男の人の、コレ……ずるいよお♡

イク

イク

イク

もはや、自身の肉欲に正直になった
析は、恥じらいやためらいなどなく
ただただ、己の欲するままに
男の性器をいじめて楽しんでる。

「ぎゅぽっ♡ぎゅじゅじゅじゅっ♡……♡
ああむ、あむ♡はあ♡れろれろ♡
だ、出さないんですか？このまま♡」

キツく肉茎を吸い、絞り上げながら
祈は男に尋ねた。
どこか、調子にのったニュアンスを
感じなくもない、その言葉に――

「このガキツ！
図に乗りやがって!!」
ブチュブチュブチュ♡♡♡

ハッ♡
ズン♡

チュ♡

お♡お♡

いよいよ追い詰められ、
精神的にも余裕のなくなった
ズ男は、一転、反撃に出る♡

「あッ♡ああああ♡
はい、ってえ……ッ♡♡」
フエラで充分すぎるほど
いきり立ったペニスを
身体の奥まで突き立てられる♡

チキ

ちや

14

14...

男の性器をしやぶりたてる行為で
すでに身体は準備を完了しており、
腔口からは、透明な愛液が
トロトロと流れ出ていた。

「くっ……こっちも
アツい……っ」
すでに余裕のない男は、
祈のナカの熱さ、狭さに
歯を食いしばった。

愛液にみちみちた内部は
ヒタ感も強く、ぎちぎちと
内部に入ってきた男根を歓迎する。



「くぁ…、す、

吸い上げられる…ッ」

ペニスから粘液を

絞り上げるように、腔内部は蠢く。

ああ♡

回転してすらいるのでほと
疑いたくなるほど、
肉茎に腔はからみつぎ、
ギュッギュと締め上げてくる。

はぁ♡

はぁ♡

ズッ♡

ズッ♡

「くそッ、くそ…ッ♡」
負けじと男は、亀頭を
狭い陰道の奥まで入れ込ませ、
反撃を試みる。

「あッ♡あッ♡あ、すご♡
あは♡ズンっ♡ズンっ♡
き、きてます…ッ♡♡」



「あ、も、もっと♡
もっとくださいっ♡
おちんちん♡もっとお♡」

析が言うな否や。
ただでさえ狭い腔道が
ギチギチにペニスを
くわえ込み、しゃぶらあびる。



「おッ、おおっ、ここのガキ……」
つい先日まで、むしろ
祈をリードできていた男は、
しかし、今は祈の性欲に圧倒される。

フェラ

おめ

おめ

おめ

もはや、

フェラチオで熱を帯びていた

彼の肉茎は、悲鳴を上げるように

射精するほかない。



「ふえ………?」

も、もう終わりですかあ………?」

祈のどこか不満そうな声に、
しかし、男は息も絶え絶えで

「も、もう助介してくれ……っ
こゝこれで4発目なんだぞ………」
降参宣言する。



（そっか…。
男の人って、何度もできないんだ…。）
言われてみれば、と
精液の薄さに気づきもする析。

今の性交でも、
絶頂を味あっていた祈。
だが……。

（あ……♡♡
なんか、カラダ、
むらむらする……っ
♡♡♡
）

「あッ♡あッ♡アハッ♡
きもち、ええですか〜っ♡♡」
薄暗い空間、その奥から
別の少女の喘ぎ声が響く。

見れば、京都の大会で
一緒に舞台で競った少女
『絵馬』が、そこにいた。



パンっ♡パンっ♡パンっ♡
自らその細い腰を落として
太いペニスに腔を打ち付けていく。

チュ

チュ
チュ
チュ

やや離れた位置にいるにもかかわらず、
粘液同士がぶつかり、汁が弾ける音すら
聞こえてきそうな、激しい交合。

ズ

「ああ、最近は、有望な子は
地方からでも声をかけているんだ」
祈の疑問に答えるように、
祈の近くで息を整えるブ男が呟いた。

「この教室も、
経済的な支援は欲しいからね。
下っ端どもは知らんだろうが」
ぶよぶよとした腹を叩いて揺らし、
ブ男はどこかバカにしたように言う。

男のふてぶてしう言葉で
しかし腹を立てる暇もなく――

「あッ♡あんっ♡あんッ♡
はああ♡きもちいい♡ちんぽ♡
ちんぽ、グチュグチュすんのっ♡
きもちええっ♡♡」
祈はまぐわう絵馬を夢中で眺める。

「はぁ♡お、おぉ♡

お、お♡突き上げ…♡ツ♡

は、そこそこそこ♡♡そこええ♡

ええです♡♡あ♡あ♡あ♡ツ♡」

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

下からペニスで突き上げられ、
小さなカラダの最奥部を
乱暴にこねくられる感覚。
それは祈にも容易く想像できる。

「ふアっ♡あ、あッ♡はあぁっ♡
し、しきゅう♡子宮どつかれんのっ♡
めっちやええっ♡ええですっ♡
もっど、もっどイジメてっ♡ちんぽでイジメてえ♡」

肉茎が腔にぶつかるとたびに
狭い入口から、大量の体液が
溢れ出し、弾け飛ぶんでは
キラキラした水滴が弧を描く。

「ほお♡おおおおッ♡
おほッ♡おおおッ♡
ちんぽ♡ちんぽええッ♡
オチンチン、ぎもちええッ♡」

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

はぁ♡

いつかの大会で見た、
おっぴろぎのんぴりした
絵馬は、そこだいない。
そこだいるのは――

「あッ♡あがッ♡
あ♡あ♡あ♡はい、はい♡
も、もうダメ♡ダメですっ♡
これ、も……ッ♡わたし、わたし♡」

男の性欲をぶつけられ、
しかし、嬉しそうに
どこか楽しげですらある
一匹のメスだった♡





それから数日。
祈は、一日の終わりの
布団の中の目課が激しくなった。

自分のジユクジユクに
濡れた割れ目に指をつっこみ、
かき回してぬかき出す。



「んア♡んべん……ッ♡
んんんんッ♡♡♡
もっともっとお……ッ♡♡♡」

はっ♡

はっ♡

はっ♡

ぬちっ♡

くちっ♡

くちっ♡

乳首をつねり、
膣を刺激し
満たされない性欲を
どうにか解消しようとする。

「あああ♡ずるい、ずるいよお♡
わたしも、わたしもっ♡
もっど、もっどしたい……♡♡」

思い出すのは
先日みかけた絵馬の痴態。
同年代の少女のセックスを
思い出しながら、自慰にふける。

「もっとしたいっ♡もっと♡
おチンポ♡ちんぽ♡
ちんぽでちゅぽちゅぽ♡」

「ぶっといのでズンズン♡
ズンズンされたい♡
お、おおっ♡あ♡ぎもちいい♡
もっと♡ぎもちよく、なりだい♡♡」



男の肉欲に乱されたい♡
太い肉茎を突き立てられ、
子宮をこねくり回され、
脳天まで届く快樂電流を味わいたい♡

「ふおっ♡ほおおっ♡
ちんぽ♡ちんぽお♡エッチなこと♡
エッチしたい♡エッチしたい♡」



親に見つかからないように
布団をかぶったまま
乳房をまさぐり、
女性器をいじめたおす。

はあー



はあー



はあー



「んひッ♡ひウ♡あ、やっぱ♡
やっぱクリ♡クリいい♡
クリ、ぎゅうううッ♡するの、いいッ♡」



「あああ♡でも、足んないっ♡

足りないよお♡

ちんぽがいいの♡ちんぽ♡

ぜったい♡ちんぽのほおがいいよお♡」

ほっ♡ぽ♡

ハッ♡

ほっ♡

ハッ♡

「あああ♡ちんぽされたい♡
おじさんチンポ♡ドチュドチュして♡
セックス♡セックスやばいよお♡
セックスほしい♡ほしい♡♡♡」

ちんぽ

ちんぽ

ちんぽ

ハッ♡

腔の中で指を聞いたり、
中をかきむしったり、
考えられる刺激を
ドロツドロに蕩けた肉を

世に与えるが

「あああ♡だめ♡だめだあ♡
足りない♡たりない♡
ちんぽがいい♡ちんぽがいいもん♡
もっと太いの♡長い♡大きいのがいい♡いい♡」

半ペそをかきながら
自分の指で満たされない
性欲を慰める。

ちんちん

「あ♡で、でも、イ……」

イク……♡イけそ♡
い、い、い……い、ぐう……ッ♡」



「ああ……、イけたけど……
これじゃ、ぜんぜん……」



「あッ♡あッ♡
ああッ♡はあッ♡」

あッ♡あッ♡

あッ♡あッ♡

「ちよ、は、はやい……ッ。
ほ♡君、ちよッと、早すぎ……ッ」

ぶびゅびゅびゅッ♡
たまらず、いつものフ男は
射精する。
熱くも狭い祈の腔に
完全に絞られた格好だ。しかし

「ま、まだ出来るもんっ♡
できますよねっ♡
おまんこ、ギュッてしますから♡♡」

ぎゅうううう……♡♡
「くおツ！ お、おおツ♡
ちよ、ちよっと、休ませ」

「あはツ♡やった♡
やっぱり、出しても大っきいまま……♡
このまま、タンタン♡しますからッ♡
「ま、待って」



ちんぽっ

ちんぽっ

おちんぽっ

おちんぽっ

いっ

いっ

いっ

いっ

いっ

はっ

はっ



「おおおおっ、くっ……
これ、ちよ、ちよっど……ッ」
「えへへッ♡はあぁ……♡
ちんちん、イイい……♡いいよお♡」

「あ♡またプクッて♡
おちんちん、ぷくって
太くなりましたよ♡
ね♡もっかい出しましょうね♡」

「や、やめ……もう……」
「だいじょうぶですよっ♡」
「またしぼんだら、おまんこで
ギュウ♡しますからっ♡」

「おちんぽ♡おちんぽ♡
中でビュウ♡ビュツびゅうツ♡
こどもオマンコで♡おとな様ちゃんぽ♡
ドピュドピュしましうね♡」

「ほおら♡イって♡

イキましよう?♡

ビュウしよ♡イって♡イけっ♡

イけっ♡このままビュッビュビュ♡♡」

「いづどもオマンコに

―出しちやえ♡♡」





あはっ
イクイク

イクイク
イクイク

イクイク
イクイク

イクイク
イクイク

イクイク
イクイク



「あはは……♡

いっぱい出たあ♡

せーし♡ビュッビュッ

びゅうううっ♡♡」

んはあ♡

は……♡

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

「ア……ああ♡

きもちいい♡

ナカ、あつたかあ……♡」

はあはあ

はあはあ

「じゃあ、

もっかいしましょうね♡♡」

「ひッ……ひいひいひいッ!!」



NextStage 『End Spin』

2025/05

『教室経営を助けるための『かんたんなお仕事』2nd spin』

当作品の無断複製・無断アップロード・無断配布
また、画像の改変や使用等は禁止しております